

『愛子』

巽 大輔

今回は“場”の話をさせていただきます。場、といっても運動場とか、ボーリング場といったような場ではありません。電磁場とか、重力場といった場です。ここまで来ると、表題を見て「愛子？なにになに？」と興味をもたれた方も、憤慨されていることと思いますが、もうしばらくお付き合いください。

場の概念を確立したのはファラデーで、彼はクーロン力の作用する空間に「電場」という考えを取り入れました。場とはなかなか難しい概念です。もちろん場は目に見えません。場とは何かということは無理してひとことで言うと、「エネルギーが存在する空間」といってもよいでしょう。力の背後には場があるのです。そして、その場には「量子（素粒子）」が存在するという概念が現代物理学の一般的な考え方です。つまり、力は量子をやり取りすることによって伝達される、と言えます。例えば有名なものは、湯川博士が提唱された中間子の場です。これは、原子核の中にはπ中間子が存在し、これをやり取りすることによって陽子と中性子は引き合う、というものです（中間子による力は、現在ではグルオンという素粒子による「強い力」とよばれています）。また、電磁場には光子が存在し、荷電体（電子など）は光子をやり取りすることによって互いに力を及ぼします。これが「電磁気力」です。これら2つの力の他にも、量子をやり取りすることによって発現する力には、「弱い力」および「重力」があり、それぞれの場にはウィークボソン、グラビトンといった素粒子が存在するとされています（ただし、グラビトンはまだ発見されていません）。

前ふりがずいぶん長くなってしまいましたが、ここで私は新しい力の場、新しい素粒子の存在を予見しようと思います。という、とても聞こえが良いのですが、この場合は、物理的な理論に基づいて推察されたものではなく、私の単なるお遊び精神に基づいたものであることを予めお断りしておきます。

さて、突然世俗じみた話になってしまっても恐縮ですが、「場がしらけた」とか、「あの人が来たおかげでぱっと場が明るくなった」といったことは、日常の会話でよく聞かれることです。物理学者はこのような“場”は気にも留めません。しかし、このような場も、場である以上、もっと深く考察せねばなりません（と、私は勝手に思っています）。この場合の“場”は人と人の間に作用します。そして、作用する力は、「しらけた」では斥力、「明るくなった」では引力（魅力といってもよい）でしょう。この力はいったいなんでしょうか？

それは、“愛の力”です。

人と人の間だけではありません。「この子犬に慰められた」とか「この歌を聴いて気持ちが晴れた」とかいうように、人と他の生物、あるいは人と物（概念的な対象も含めて）の間にも作用します。前者の場合は、人と動物との愛、後者の場合は人と物のようではありますが、実は歌という作品を通じてのミュージシャンと聴き手との愛といえます。このように愛の場（「愛場」とでも呼びましょう）は人をはじめとする生命がいる時空間に普遍的に存在するのです。普遍的なゆえに愛場はやはり“場”として考えなければならないのではないのでしょうか。そして、その愛場に存在すると考えられる粒子が「愛子（あいし）」なのです。先の例からもわかるように物理学でいう素粒子には～on という接尾語がついています（例えば、光子はphoton）。そこで、この「愛子」もloveon（ラブオン）と名づけてみてはいかがでしょうか。ここまで来ると、冒頭で憤慨されかけた方は、本当に憤慨されていることと思います。でもそれは、これまで述べてきた考え方という、私から放たれた愛子がこの文章を通じてあなたに斥力として伝わったといえるのです。

同じ愛子でありながら斥力を伝えるというのはいかにも悲しいことです。人はみんな愛子を放っているのですから、それがすべて引力や魅力として働いてほしいものです。「愛子」。う～ん、なかなかいい響きだ。ちなみに、これと似た名前の「上村愛子」がスキー場にいます。またしらけた？それは、私から放たれた愛子が…。